

第6回「森の広場」市民観察会

観察ガイドブック



アキアカネ

日 時： 2008年9月14日(日) 14:00～17:00

テーマ： 「虫の声を聞いてみよう！」

「秋の草花と森の広場の紅葉を探してみよう！」

次 第： 1. 受 付 13:30～
2. 開会式とオリエンテーション 14:00～
3. 野外観察会 14:30～
4. まとめと閉会式 16:30～

主 催： 森の広場市民観察会実行委員会 (青森市内8団体参加構成)

共 催： 新城縁故者委員会 後 援： 青森市、東奥日報社

「森の広場」設置の経緯

太平洋戦争後、合浦公園に建設された市営競輪場の郊外移転に選択されたのが新城財産区所有の森林地帯でした。当時新城財産区から譲り受けた森林約53haの内、競輪場建設に要した22haの残存森林の利用法として考えたのが「スポーツその他の多目的広場」だったようです。名称は「森の広場」とし、管理棟、研修室、トイレなどの他、野球場、ゲートボール場などを林野庁補助事業である「生活環境保全整備事業」で整備したもので、管理運営は青森市生涯学習課スポーツ振興チーム所管の施設となりました。しかし、残念ながら利用者は野球同好者だけで、他に山菜採りの人が訪れる程度だったため、周辺の手入れも疎かにされ、せっかく整備したミズバショウ観察路も崩落したままになっています。地元新城の住民ですら知らない場所で長い間眠った状態の施設でした。

この度の青森市内自然愛好諸団体の合同観察会をきっかけに一般市民への啓蒙を計り、将来的には「青森野草園」をも視野に入れた運動に発展できればと考えております。

遊歩道だけは毎年管理を委託されてきた「新城財産区縁故者委員会」の皆様により刈り払いが行われ、歩きやすく整備されております。四季折々の森林浴や草木の観察ルートとしてご利用下されば今回の合同観察会を企画した関係者一同の喜びでもあります。

市民観察会スタッフ一同 (2006.5)

森の広場市民観察会スタッフ(主催8団体、順不同)

「青森の自然環境を考える会」「ウォッチング青森」「青森・草と木の会」「樹木医会」
「青森野鳥の会」「森林インストラクター会」「青森自然誌懇話会」「やぶなべ会」

■ 生物観察のポイント

- [生育環境] どんな処にいましたか？
- [行動(動物)] どんな行動をしていますか？
- [状態(植物)] どんな状態(芽立ち・花・実など)ですか？
- [生物の種類] 特徴的な形や色を観察しましょう。スケッチなども有用です。
- その他気づいた点などをどんどんメモしましょう。自宅へ帰ってからメモを再確認しながら調べると、とても勉強になります。

秋の虫たち1

エンマコオロギ (コオロギ科)

日本産コオロギの仲間では最も大きく、各地に最も普通の種類である。鳴き声も力強く美声で鳴くがあまりにも身近の存在なのでスズムシの様に飼育される習慣は無い。枯れ草の間や石、木材などの下などに隠れている場合が多く、メスが同居している場合には鳴き声の最後を低音で「…リー」と長めて鳴く。



カンタン (コオロギ科)

8月上旬からヨモギやクズの藪で「ルルル…」または「ロロロ…」と連続した美しい鳴き声で鳴く秋を代表する虫である。体は乳白色で細長く扁平。クズなどの葉裏に隠れている場合が多く、鳴くとき葉に開いた穴から頭だけ出して鳴く習性がある。見かけは弱々しいが、ほとんど肉食でアブラムシなどを捕食する。



タンボオカメコオロギ (コオロギ科)

中型のコオロギで黒色、オスの頭部は前方に丸く張り出してやや扁平になる。やや湿った草地を好み「リリッ、リリッ、」と断続的に鳴きますが、♀と同居の場合には「リリリー」と繰り返し、やや低音となって最後を引き伸ばして鳴きます。コオロギ類には早に出会えば鳴き声に低音、引き伸ばしの傾向が一般的に認められます。



ハネナガフキバッタ (バッタ科)

ミカドフキバッタの翅は♂♀ともに褐色の短い翅が痕跡的に付いているだけであるが、本種は翅が良く発達して飛翔する。頭・胸部の形態はミカドフキバッタに類似している。沢沿いのフキの生えるような場所に普通。



秋の虫たち2



ヒナバッタ (バッタ科)

小型のバッタでよく飛翔する。♂は後肢と翅を摺り合わせて「シユルシユル」と鳴く。前胸背面には1対のく字型の白斑がある。やや乾燥した場所を好み、道路脇の刈り払われた枯れ草などでよく見られる。同一個体を4~5回連続して追いかけると疲労して簡単に手掴みも可能である。



ミカドフキバッタ (バッタ科)

体色は緑で♂♀ともに褐色の短い翅が痕跡的に付いているだけで飛翔能力は無い。幼虫時代には群棲する習性があり、フキの葉上などに群がっている。



アシグロツユムシ (キリギリス科)

ツユムシの仲間では後ろ足の脛節が黒いので他の仲間と区別できる。林縁のクズやササの葉上に見られる。森の広場では近似種のエゾツユムシ、セスジツユムシなども分布しているが、個体数の多いのは本種である。羽の長さに対して体が小さいので飛翔力があり、日中でも良く飛ぶ。



ヒメクサキリ (キリギリス科)

細長い体形のキリギリスで湿った草地を好む。水田の畦などにもいる。「ギー」または「ジー」と連続して鳴くが老化した耳には聞こえないこともある。緑色型のほか淡褐色型の個体もある。頭部は前方にやや突出している♀の産卵管は長く翅端を越える。

秋の虫たち3

ヒメギス (キリギリス科)

体は黒褐色で前胸背は褐色または緑色の2型がある。前胸側面後方に白い縁取りがある。♂は翅を摺り合わせて「シリリリ」と弱い音で鳴く。日中、日当たりのフキやクズの葉上などで休息する習性がある。短翅型が普通であるが、山地では長翅型も見られる。



ウスバキトンボ (トンボ科)

短期間で繁殖を繰り返しながら北上することが知られており、青森では初夏の頃、梅雨の晴れ間にアカアカネを一周り大きくした様な黄色いトンボが漂々と漂っているのに気づくことがある。毎年、9月～10月に「国際芸術センター・青森」の人工的な水辺で大量のヤゴが発生する。



ノシメトンボ (トンボ科)

いわゆる「クルマトンボ」と呼ばれる翅の先端部が褐色のトンボである。アカネ類の中では最も大型で♂は成熟すると暗赤色になる。羽化すれば水辺を離れる傾向があり、林縁や道路沿いで生活している。アカネ類は胸部側条の形で分類されるが、「ノシメトンボ」の黒条はすべて胸部上縁に達している。



マユタテアカネ (トンボ科)

顔に黒斑が2個あるのを眉に見立ててこの呼び名がある。♂の腹部は鮮やかな赤色になり、腹部の末端が上方に反り返っている。羽化後も水辺で生活する個体も多く、腹部が赤くなった個体は水辺で縄張りを張っているのが良く観察される。メスは赤化せず黄色のまま翅端が褐色を呈する個体と翅端が透明なままの2型がある。



秋の虫たち4



ゴイシシジミ (シジミチョウ科)

小型のシジミチョウで翅の表面は♂♀ともに黒褐色である。裏面は白色で名前の通り体に比して大きな黒い斑紋がある。幼虫は肉食でササのアブラムシを食べるので成虫もササ藪の上でよく見られる。



メスグロヒョウモン (タテハチョウ科)

名前の通り♀の翅は黒く、イチモンジチョウの様な色調である。♂はヒョウ模様で別種の様に見える。夏のチョウでオカトラノオやサワヒヨドリ、ヨツバヒヨドリなどの咲く頃、他のタテハチョウ科の個体に混じって訪花吸蜜している。



ゴマダラカミキリ (カミキリムシ科)

大型の美しいカミキリですが実は大変な害虫です。とくにヤナギ、ハンノキ、シラカバなど比較的成長の早い樹木では好んで加害され倒木被害も出ます。被害は幼虫による食害のほか、成虫も枝の樹皮を食べるので枝の部分枯れを起こしたり、折損被害があらわれます。本種による被害は森林の他、一般家庭の庭でも発生します。



オオカマキリ (カマキリ亜目)

お馴染みのカマキリですが、最近青森地区で見られるのはオオカマキリ1種になってしまいました。以前(昭和17~18年頃)は前肢内側に顕著な斑紋のあるコカマリが郊外丘陵の採草地に生息していましたが近年全く見られなくなっています。

クモ・その他

ジョロウグモ (ジョロウグモ属)

秋～晩秋に出現する大型の美しいクモです。ネットは複雑な3層構造になっています。♂ははるかに小型で数匹が巣の中に居候的に同居していて交尾のチャンスを狙っています。



ワカバグモ (ワカバグモ属)

5～6月の春に出現する名前の通りに若葉色をした美しいクモである。ネットを張らずに葉上で餌の昆虫を待ち伏せする。成熟♂は画像のように頭胸部前方歩脚の基部は褐色に着色している。



オオトリノフンダマシ (トリノフンダマシ属)

秋季、林縁の灌木に褐色紡錘型の卵囊が2～3個見つかることがある。その近くには一見鳥の糞を思わせる物体が葉裏に付いていることがある。これは卵囊を見守るオオトリノフンダマシというクモの1種である。「森の広場」には近似種のトリノフンダマシも生息し、球形の卵囊を作っている。



ハクセキレイ (セキレイ科)

地上で尾羽を上下に動かしながら餌をあさる習性がある。セキレイの仲間は人間社会に近い場所で生活し、時には営巣場所を動く車体の隙間に選択してしばしばテレビの話題になったりする。ハクセキレイとセグロセキレイは両種とも白黒の色調のため紛らわしいが、頬の付近が黒いのがセグロセキレイである。



秋の植物1



エゾツリバナ (ニシキギ科)

5月頃に咲く淡緑色の花は分かりにくいですが、秋は深紅の実が鮮やかに目立つ。名前はつり下げられたように咲く花の形状による。森の広場では、西側の観察路沿いに植栽されている。



ケチヂミザサ (イネ科)

日本各地に生育する一年草。縮れた葉の形状から、その名が付けられた。実の先端の芒(ノゲ:イネ科の実のとがった部分)に粘液が分泌され、衣服などに付く「ひつつき虫」の一つ。森の広場では、林下に大きな群落をつくっている。



ミゾソバ (タデ科)

全国各地の湿った場所に生育する。「溝」に生える「蕎麦」に似た植物として名付けられた。花色は白に近いものからピンクが濃いものまで変化に富む。秋はタデ科植物の花が多く、イヌタデやミズヒキなども森の広場で観察できる。



ヤマハギ (マメ科)

秋の七草の一つで、日本各地に自生する半落葉植物。樹高は1~3m。名前はそのまま山に生える萩の意。森の広場では、この他にイヌハギ・メドハギ・ヌスピトハギなどのマメ科植物も花を咲かせます。

秋の植物2

ヤマブドウ (ブドウ科)

山地に生育する野生のブドウ。ワインなどに加工される場合もあり、食用になる。花は初夏に開花するが、目立たないので注意しないと気づきにくい。「森の広場」では、今年大豊作のようだ。また、近縁のノブドウも生育するが、こちらは食用にならない。



センブリ (リンドウ科)

千回煎じてもまだ苦いという意から「千振」と名付けられた。別名「当薬」の名の通り、古来から用いられている薬草。健胃効果の他に、殺虫剤や育毛剤として用いられる事もある。



ミツバアケビ (アケビ科)

熟した実の形から「開け実」と呼ばれたことから名付けられた。青森で見られる「アケビ」は、本種で「アケビ」は生育していない。「アケビ」の小葉は5枚だが、本種は3枚。実を食用とするほか、蔓をかご細工などに利用する。また、茎は生薬としても用いられる。



ツリフネソウ・キツリフネ (ツリフネソウ科)

その花の形から釣り下がった帆掛け船に見立てられ「釣船草」と名付けられた。湿った環境を好み、大きな群落をつくる事もある。草丈は50cmを越える。ハウセンカの近縁種で、熟した実から勢いよく種子をはじき飛ばす。



植物 (キクのなかま1)

秋の森の広場で目につきやすいキクのなかまをまとめてみました。早いものは8月から花をつけ、遅いものは11月頃まで咲いています。キク科植物は、小さな花が多数集まって一つの花に見える点が大きな特徴です。その花の集まり(頭状花序)を良く見ると、周辺部に花びらのように見える舌状花と中心部に細長い管状花が観察できます。それら一つ一つが生物学上の「花」にあたります。種類によって、舌状花のみのものや管状花しか無いものも有りますので、それぞれの植物を詳しく観察してみてください。



アキノノゲシ (キク科)

東南アジア原産の史前帰化植物で、レタスの仲間。春に咲くノゲシに似ていて、秋に咲く事から「秋の野芥子」と名付けられた。淡黄色の舌状花をつけ、草丈が2m近くなることもある。茎は放置すると堅くなり、チャンバラごっここの刀として使われたりすることがある。



アメリカセンダングサ (キク科)

北アメリカ原産の帰化植物。草丈は1mを越える。葉が「センダン」に似ているので「亜米利加梅檀草」と名付けられた。花は、殆どが管状花のみ。実は棘があり、衣類にくっつく「ひっつき虫」の一つ。草木染めの原料として使われる事が有る。



エゾカワラハハコ (キク科)

全体が白い毛で覆われるため、遠くからでも目につきやすい。名前は「(北国の)蝦夷」+「川原に生える」+「母子草」の意。草丈は30~50cm程度。花は、管状花で、両性花を付ける株と雌性花のみを付ける株がある。

植物（キクのなかま2）

オオアキノキリンソウ（キク科）

「セイタカアワダチソウ」の近縁種だが、これは日本の在来種。草丈は数十～80cm位。名前は「大きな」+「秋に咲く」+「麒麟草」の意。整腸・風邪などに対する薬効がある薬草とされていて、若芽は食用にもなる。



ゴマナ（キク科）

草丈は1.5m程になる大型の草本植物。名前の由来ははっきりしない。茎の先が多数の枝に分岐し、黄色い管状花の周りに白い舌状花を持った頭花がたくさん咲く。葉と茎に細毛があり、ザラザラしている。若芽は食用になる。



ノコンギク（キク科）

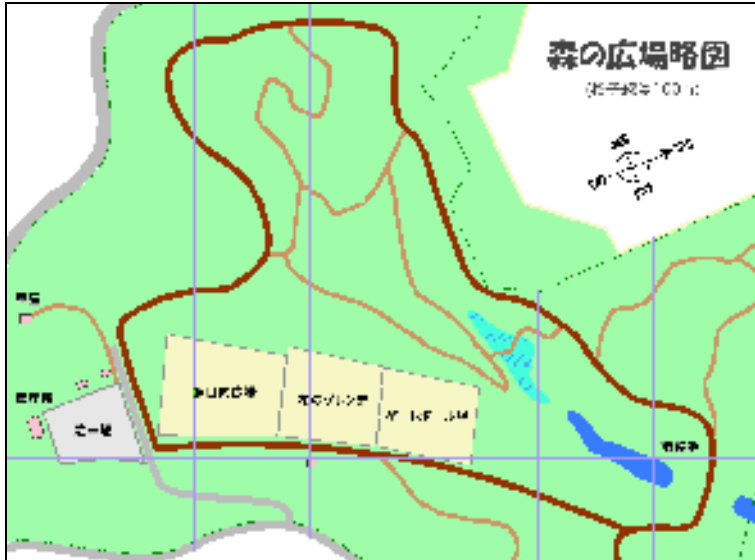
本州～九州に分布し、人里から高原まで生育するのでごく普通に見られる。名前は「野に咲く紺色のキク」の意であるが、花色は濃色から白っぽいものまで変化に富む。草丈は50cm前後。森の広場では、晩秋でも花を付けている株が観察できる。



ハンゴンソウ（キク科）

日本全国に分布する草丈1mを越える大型で多年生のキク。名前は、葉の形状を幽霊の手に見立てて「反魂（魂を呼び戻すこと）草」と付けられた。若芽は食用になるが、アクが強い。森の広場では、多目的広場の西側観察路沿いに多数の株を観察できる。





■ 野外観察にあたってのご留意事項

■ 野外における危険性について

- ✓ 「森の広場」には、皮膚かぶれをおこす「ウルシ」などの植物や刺されるとショック状態を引き起こす「スズメバチ」などが生息しています。危険性を認知して行動して下さい。
- ✓ 「森の広場」の観察路は非常に良く整備されていますが、急勾配の部分も有ります。濡れた路面や水辺などで足を滑らせて怪我をしないよう、慎重な行動をとりましょう。
- ✓ 自然の中では、大なり小なりの危険性が伴いますので、ご自覚の上行動には充分ご注意ください。

■ 野生生物の保護について

- ✓ 鳥や小動物などを驚かせないように静かに行動しましょう。
- ✓ 足で踏みつける事によって弱っていく植物が有ります。足下にも気を配り、観察路からはずれる事は最小限にしましょう。
- ✓ 生物の採集は、より良く観察するための手段の一つです。ただ、多くの人が採集などを行うと自然のバランスが崩れてしまいます。採集や切り取りなどは可能な限り控えて下さい。
- ✓ 「森の広場」は、そこに生息する生物たちの生活の場です。将来にわたって生き物たちが暮らせるよう、「彼らの世界に、私達がお邪魔している」という気配りで接しましょう。